

西多摩郡檜原村での歴史資料保全と 地方協創の可能性

西 村 慎太郎

【要 旨】

本稿は筆者が現在展開している東京都西多摩郡檜原村を事例として、同村がどのような歴史資料（主に古文書）の保全を進めてきたか、文化財行政や郷土史の動向を踏まえた上で、歴史資料の保全・資源化・活用の現状と課題、実践と可能性を提示するものである。また、筆者が檜原村と関わりを持つ契機になった文書群の目録編成についても合わせて述べてみたい。

檜原村は1970年代から80年代にかけて、自治体史編纂や郷土史研究、資料保全が盛んであり、郷土資料館建設にまで至った。昨今の全国における地域に遺された古文書の散逸状況を踏まえて、檜原村の現状をヒアリングした結果、多くの課題が遺されていることを知り、「檜原村における歴史資料（特に古文書）の保全・活用についての提案」を教育委員会へ提案した。その際、歴史資料が地域のアイデンティティであるという言説は、現代社会において通じにくいいため、一文書群を事例として、アーカイブズ的な目録編成を行い、その文書群の特徴を提示することで、教育委員会に対して重要性を提起した。

学術的には、アーカイブズ学と歴史学、地域歴史資料学をミックスして、地域貢献や地域持続を住民とともに目指すことの実践を提示する。

【目 次】

はじめに

- 1 檜原村の歴史と現状
- 2 檜原村の自治体史編纂・郷土史、資料保全
- 3 檜原村宇田家の歴史と文書群の階層構造
- 4 目録作成後の状況と課題・可能性

おわりに

はじめに

高度経済社会と評された昭和30年代から40年代を契機として、長い時間を掛けて地域社会の疲弊が顕著になり、近年では「地方消滅」「限界集落」に対する警鐘が鳴らされている。これらの用語は国家権力による「選択と集中」のための方便に過ぎない点もあり、それに対する批判もみられるが¹⁾、国家権力の愚策によって、地域が衰退し、以って、国の政策を地方自治体が唯々諾々と受け入れなくてはならない状況になっているのは間違いない。

そして、文化財や歴史資料の保全が、このような地域社会の疲弊と連動していることも間違いない。小泉構造改革以降、公務員削減による文化財担当者の減少と多忙化、平成の市町村合併による広域化、学校教育の現場が多忙となったため教員が地域史・郷土史に関与しにくくなっているなど、2000年代以降の国家権力による政策がダイレクトに地域社会の文化財・歴史資料の保全に影響している。

加えて、2019年4月に改正文化財保護法が施行された。吉田政博氏・岩崎奈緒子氏・馬場憲一氏などが詳細に論じているように、1990年代以来、文化財をどのように活用していくか、否、「国家権力のため」に文化財をどのように利用していくかという方策の最終形態（この後もあると思われるが）である²⁾。そのため、これから先、都道府県によるトップダウン的な「大綱」を受けて、各自自治体が総合計画の策定を進めざるを得ないことになるが、そこには国家権力と都道府県の顔色を伺いながら村度する文化財行政が展開するであろう。そして、そこに「使える文化財」と「使えない文化財」の峻別が平然と行われるという危機感を抱かざるを得ない。さらに地域社会は疲弊の道を辿る。

このような諸問題を抱えた状況にあって、筆者は何ができるのか。本稿は筆者が現在展開している東京都西多摩郡檜原村を事例として、同村がどのような歴史資料の保全を進めてきたか、文化財行政や郷土史の動向を踏まえた上で、歴史資料の保全・資源化・活用の現状と課題、実践と可能性を提示するものである。また、筆者が檜原村と関わりを持つ契機になった文書群の目録編成についても合わせて述べてみたい。一見すると、前者の歴史資料の保全・資源化・活用に関わる点と目録編成を同一論文で述べることに違和感があるかもしれないが、檜原村での場合、目録編成こそが大きな契機であった。

なお、本稿では主に民間所在資料、ないしは民間アーカイブズと称される歴史資料を対象とする。

-
- 1) 山下祐介『限界集落の真実 過疎の村は消えるか?』（ちくま新書、2012年）、同『地方消滅の異増田レポートと人口減少社会の正体』（ちくま新書、2014年）。
 - 2) 吉田政博「文化財保護行政の動向と地域の歴史遺産 - 文化財保護法の改定問題と文化財活用の方向性 -」（『歴史評論』822、2018年）、同「文化財保護法等の改正とこれからの地方史研究をめぐる課題について」（『地方史研究』69-4、2019年）、岩崎奈緒子「歴史と文化の危機 - 文化財保護法の「改正」 -」（『歴史学研究』981、2019年）、馬場憲一「文化財保護法改正について - その概要と改正への意見・論評を中心に -」（『文化経済学』16-1、2019年）。なお、吉田論文が掲載されている『歴史評論』822は、特集として「本当の意味での歴史遺産の活用とは」を掲げており、文化財保護法改正以外の視角も含めた重要な指摘が散見される。

1 檜原村の歴史と現状

最初に、檜原村の概要について述べたい。檜原村は島嶼部を除くと東京都唯一の村である。檜原村公式ホームページの「檜原村の場所（位置・地勢）」のページには、端的に次のように記されている。

檜原村は東京都の西に位置し、一部を神奈川県と山梨県に接しています。面積は105.41平方キロメートルとなっており、村の周囲を急峻な山嶺に囲まれています。総面積の93%が林野で平坦地は少なく、村の大半が秩父多摩甲斐国立公園に含まれています。村の中央を標高900メートルから1,000メートルの尾根が東西に走っており両側に南北秋川が流れていて、この川沿いに集落が点在しています³⁾。

檜原村の人の痕跡は古く、縄文時代早期以来の遺構が確認されている⁴⁾。奥多摩町との境にまたがる大岳山頂の大岳神社は天平19年（747）に金峯山の蔵王権現を勧請したことによって成立したという由緒があり、また、人里地区の五社神社には150cm以上に及ぶ平安時代後期の蔵王権現立像（東京都指定文化財）が遺されている。早い段階から山岳信仰が広がっていたものと思われる。

12世紀頃には武蔵七党のひとつ、西党（武蔵守日奉宗頼が土着して日奉氏一族）の平山氏が当該地域を支配下に治めていた。一の谷の戦いで熊谷直実と先陣争いをしたという逸話で著名な平山季重を輩出した家である。平山季重の末裔が檜原に居館を構えて、この地を支配した。戦国時代には小田原北条氏に仕えて、甲斐国と武蔵国との国境に位置するこの地を守った。近世に成立した甲州道中（甲州海道・甲州街道）は小仏峠（現在の東京都八王子市）を通るルートだが、もともとは檜原村の中央を東西に横断する浅間尾根道と南秋川溪谷道を通るルートがあり（古甲州道）、戦国時代には軍事・交通の要衝であった。そのために近世に至っても重要視されており、口留番所が村内の本宿地区に設置されていた。

近世後期の支配は一村ほぼ幕府領で774,264石、その他、吉祥寺領5石5斗、吉野采女（大岳金峯山蔵王権現。後の大岳神社）領15石であった。村内の広大な森林のうち、三頭山をはじめとした5つの山で計324町8反が幕府直営の御林山に設定されている。当然、基幹産業は林業であり、建築用材のみならず炭を生産することによって江戸などのエネルギー資源の供給を担った。幕末の炭の出荷量は141,500俵に及んでおり、この炭をめぐる五日市炭問屋とたびたび争論になっている。

近代以降、林業に加えて、養蚕も盛んにおこなわれ、中里地区の宮田静応による三和洋行などをはじめとして、少なくとも村内8ヶ所に製糸工場が建設されて、横浜へ向けて出荷した。最盛期の昭和15年（1940）には24,201貫の収量に達している。戦後はシクラメン栽培などを行う農家も多く、また、近年では観光産業を展開している。なお、現在の村域は近世のそれと全く変わっておらず、明治から平成に至るまで市町村合併が無縁の村であった。

2019年1月1日現在の檜原村は1181世帯2217人である⁵⁾。人口は最も多かった時期の1/3に

3) 「檜原村の場所（位置・地勢）」（檜原村ホームページ。2016年8月30日更新。2019年12月26日閲覧。
<http://www.vill.hinohara.tokyo.jp/0000000125.html>）。

4) 以下、檜原村の歴史に関しては、檜原村史編さん委員会編『檜原村史』（檜原村、1981年）参照。

5) 『広報ひのはら』478（檜原村役場総務課、2019年）24頁。

なっている。人口減少が引き起こしている現状については、細貝和寛氏が3点に分けて分析している⁶⁾。①学校の統合。1986年に村内3校あった中学校が統合され、1999年に村内8校あった小学校が統合された。②高齢化。2017年6月段階で高齢者65歳以上の高齢者が49%に達している。③自治活動の縮小化。前記①②を踏まえれば、当然自治活動を縮小せざるを得ないし、当然、地域に遺された歴史資料を継承していくことも困難になってしまう。実際、細貝氏が分析対象としている神戸地区についても、民間信仰の講の自然消滅、働き盛り世代の都市部流出による祭りや郷土行事の担い手不足を指摘している。

この檜原村のような状況は、全国的に見て驚くに値しないであろう。檜原村を事例に検討することは、国内の多くの地域歴史資料・民間所在資料の問題や課題を解決するための糸口になるものと思われる。

2 檜原村の自治体史編纂・郷土史、資料保全

次に、檜原村における自治体史編纂と郷土史について概観してみたい。加えて、民間所在資料の保全・調査という視角を中心に検証してみたい⁷⁾。

檜原村の歴史の掘り起こしの端緒は「皇国地誌」編纂である。拙稿でも述べたように⁸⁾、明治新政府は国土の掌握のため、明治5年(1872)から「皇国地誌」の編纂を開始する(太政官達第288号)。そして、同8年6月5日に「皇国地誌編輯例則並ニ着手方法」が発せられるが、このうち「着手方法」に「旧記等民間ニ存在スル者往々散佚ニ帰シ、終ニ徴古ノ助ヲ欠ニ至ル、尤注意捜求スヘキ事」と記されており(太政官達第97号)、明治新政府は民間所在資料の散逸を危惧していたものと思われる。

「皇国地誌編輯例則並ニ着手方法」を受けて、同11年、神奈川県⁹⁾は斎藤真指に第十三大区町村地誌取調方(のちに同21年西多摩郡全町村地誌材料調査方)を委嘱した。斎藤真指とは¹⁰⁾、武蔵国多摩郡乗願寺村(現在の東京都青梅市勝沼)名主の家出身で、平田派門人となり、明治時代以降は沢井村(現在の青梅市沢井)の青渭神社祠官に就任、のちに教導職のうち大講義にまで進んでいる。斎藤真指は明治11年の地誌取調方委嘱から同23年4月の調査終了に至るまで1山2町95村の皇国地誌の草稿を編纂しているが、そのうちのひとつが皇国地誌版の『檜原村誌』であり、編纂に当たって口留番所を管理した吉野家文書をはじめとして多くの文書を

6) 細貝和寛「口述史から見える村の地域資源と活用を考える ―檜原村神戸地区の事例―」(一般社団法人地域活性化センター全国地域リーダー養成塾修了レポート(第29期)。2019年12月26日閲覧。<https://www.jcrd.jp/seminar/2915hosokai.pdf>)。

7) 以下、村史作成準備委員会発足から『檜原村史』刊行までについては、「編集後記」(前掲註4『檜原村史』)参照。なお、『檜原村の石仏』1～3(檜原村教育委員会、1973年～1977年)や埋蔵文化財報告などの成果もあるが、本稿では古文書(アーカイブズ)に限定する。

8) 拙稿「民間所在資料保全の過去・現在・未来」(木部暢子編『災害に学ぶ 文化資源の保全と再生』勉強出版、2015年)など。

9) 明治11年11月19日郡区町村編制法施行によって神奈川県西多摩郡が成立し、同26年4月1日に東京府管轄となるまで、檜原村を含む西多摩郡域は神奈川県管下であった。

10) 斎藤真指については、滝沢博「皇国地誌と斎藤真指翁 ―西多摩郡誌の校訂にあたって―」(青梅市郷土博物館編『青梅市史史料集第25号 皇国地誌・西多摩郡村誌(五)』青梅市教育委員会、1974年)。

調査している。後述する筆者蔵の宇田家文書についても斎藤真指は筆写して、皇国地誌版『檜原村誌』に掲載している¹¹⁾。

昭和2年（1927）に『檜原村誌』が刊行された。この書はのちに編纂・刊行される『檜原村史』でも多く引用され、「昭和二年発行の檜原村史」と称されている¹²⁾。なお、当該地区の概況については昭和12年に編纂された孔版の『阿伎留地誌』があるものの、その際には民間所在資料の調査をしていない¹³⁾。

戦後、東京都の調査の一環として、1956年7月～12月にかけて東京都立大学人文学部の教員・学生が文書調査を行っている¹⁴⁾。メンバーは北島正元助教授・石塚裕道助手、大学院生の村上直氏・松本四郎氏であり、執筆に当たっては林亮勝氏らが関わった。この調査では檜原村神戸組坂本義雄家・出畑組宇田守雄家・上川乗組武田賢二家の文書を調査し、翻刻と分析を行っている。いずれの家も後述する『檜原村史研究』『檜原村史』『檜原村古文書目録 村の昔を書き残したもの』に掲載されており、これら刊行物の根幹を成す文書群であった。

また、前後するが、1953年以来、東京都教育委員会による文化財総合調査が実施されており、とりわけ小河内ダム建設に伴う文化財調査の過程で、檜原村における民俗調査を行っている¹⁵⁾。文書に関しては1966年度に秋川流域文化財総合調査の中で、伊木寿一（立正大学教授）・是澤恭三（文化庁文化財保護委員会調査員）・木村礎（明治大学教授）各氏によって調査が成されたが、成果については「報告が不十分」とのことで公表されていない¹⁶⁾。この調査において檜原村の担当職員は、のちの『檜原村史研究』『檜原村史』編纂段階で教育長として編纂をリードした宇田篤夫氏（当時は教育委員会社会教育主事）であったことから、東京都教育委員会による秋川流域文化財総合調査が村史編纂の起爆剤の一因になったものと考えられる¹⁷⁾。なお、秋川流域文化財総合調査の団員に名を連ねている明治高等学校教諭・伊藤好一氏は1963年に「近世五日市炭市の流通構造」を発表し、その中で村内の文書を多く利用している¹⁸⁾。

さて檜原村の村史編纂は1971年1月21日に第1回村史作成準備委員会が開催されたことに端を発する。当時の小泉康作村長より委嘱を受けた10名が委員となり、元村会議長の岸峯進氏が委員長に就任した。委員会は近隣の瑞穂町・羽村町で自治体史編纂に関わるヒアリングを行い、

-
- 11) 「檜原村誌」（前掲註10『青梅市史史料集第25号 皇国地誌・西多摩郡村誌（五）』）。
 - 12) 現在、確認できる範囲では檜原村郷土資料館にコピーが遺されているだけである（檜原村教育委員会の御教示による）。
 - 13) 池田好之助編『阿伎留地誌』（西多摩郡第三教員会地理研究部、1937年）。
 - 14) 東京都が委嘱した東京都立大学人文学部の調査については、都立大調査団編『都下山村自治の実態調査報告書 一西多摩郡檜原村について』（東京都総務局総務部企画課、1957年）。
 - 15) 小河内ダム建設に伴う文化財調査については、東京都教育委員会編『東京都文化財調査報告書4 小河内文化財総合調査報告』第1分冊（東京都教育委員会、1957年）、同編『東京都文化財調査報告書5 小河内文化財総合調査報告』第2分冊（東京都教育委員会、1958年）。
 - 16) 東京都教育委員会編『東京都文化財調査報告書21 西多摩文化財総合調査報告』第3分冊（東京都教育委員会、1969年）。なお、この調査報告については白井哲哉氏の御教示を得た。
 - 17) なお、国内全体の流れとして、「明治百年」を契機とした自治体史編纂事業が展開した自治体も多い。前掲註4『檜原村史』においては「明治百年」が契機であったとは明言されていないが、「発刊のことば」で「今や明治維新後百年余を経過し、社会万般の変化は、まさに驚異的なものがある」と述べている。
 - 18) 伊藤好一「近世五日市炭市の流通構造」（同『近世在方市の構造』隣人社、1967年。初出は山崎謹哉編『近世関東の歴史地理』明玄書房、1963年所収）。

3月8日に答申書を小泉康作村長へ提出した。この答申書には村史編纂に向けて、①村民の手で編纂する、②歴史・自然について資料に基づいて検証する、③村民に親しめる村史を目指すという基本方針が掲げられている。

この答申書を受けて、翌1972年10月27日第1回檜原村史編さん委員会が開催される。構成員は、檜原村三役・議会正副議長・総務委員長・教育委員会委員長・教育長・教育委員3名・文化財専門委員会正副委員長・学識経験者2名・総務課長・教育課長・村史専門委員会正副委員長である。このうち、学識経験者は既述の元村会議長・峯岸進氏と、元檜原村助役・野村順氏であった。さらに、調査と村史の執筆を担う編さん専門委員会が1973年1月13日に発足した。こちらの構成員は村内の小学校・中学校の教諭が中心となっている。このように、村史作成準備委員会・檜原村史編さん委員会・編さん専門委員会のメンバーは、村内定住者及び村内勤務者によって構成されていた。答申書の①村民の手で編纂するという視角が生かされていることがうかがえよう。その後、1977年6月より執筆が開始され、1981年3月30日に『檜原村史』は刊行されることとなった。

ところで、編さん専門委員会発足から執筆・編集・刊行まで10年近い間があるが、この間、檜原村では『檜原村史研究』の刊行に着手している。『檜原村史研究』は第1巻が1974年11月、第2巻が1975年11月、第3巻が1977年3月、第4巻が1978年3月の刊行であり、1年度1冊の刊行ペースであった。同誌に掲載された論文については【表1】のとおりである。

注目したいのは『檜原村史研究』各号の編集方針である。第1巻の「編集後記」では宇田篤夫教育長が「今迄に行われた、関係各位の調査研究を集録し、「^(ママ)檜原村史研究 第一巻」を発行のはこびとなった次第です」と述べ、第2巻「序」では村長である小泉康作編集委員会長が「『檜原村史』編纂の中間報告

表1 『檜原町史研究』論文一覧

号	筆者	タイトル
1	小泉康作	序
	小泉章徳	檜原村の板碑について
	小泉章徳	出土した宋銭
	野中富雄	檜原村の岡部氏
	鷲山快天	人里五社神社の鐘銘について
	岡部駒橋	檜原村の交通について
	小林隆志	檜原村の木炭について
	浜中銀之助	檜原村上川苔の両墓制
	唐沢健一	檜原村の伝説
	岡部駒橋	檜原村の教育史資料の一部
	宮崎巍	檜原村の気象について
数馬房次	檜原村の花と木	
宇田篤夫	編集後記	
2	小泉康作	序
	小泉章徳	峰岸河内『日記用留帳』写
	唐沢健一	檜原の伝説 -岩-
	市川敏	数馬と神戸にまつわる神話
	市川敏	大嶽神社と大口真神(お神狗様)について
	田中進	管理面から見た檜原笹野式三番について
	市川敏	檜原城主平山氏について
	岡部駒橋	教育部門に関する資料
	小林隆志	漁業
	岡部駒橋	檜原村の交通に関する資料
	数馬房次	檜原の植物
小林福義	材木の計算について	
宇田篤夫	編集後記	
3	小泉康作	序
	野中富雄	檜原村における中世武士の研究
	浜中銀之助	寛文御水帳
	市川敏	檜原村の神社
	唐沢健一	檜原村の愛宕社
	長沢利明	笛吹の民間信仰
	小林隆志	檜原村の養蚕業
	宮崎巍	檜原村の気象
	数馬房次	珍しい漢方薬
	峯岸登	檜原村に自生する植物
	宇田篤夫	編集後記
4	小泉康作	序
	野中富雄	中世期日奉平山一族と檜原城平山氏累代の研究
	市川敏	檜原村の寺院
	田中進	数馬の獅子舞来由書について
	小泉章徳	小沢式三番「出はの事」写
	小林隆志	檜原村の林業
	唐沢健一	檜原村林業語彙
	峯岸登	昔の年中行事と娯楽
	市川敏	「おまじない」について
	小林福義	祈願民俗について
	岡部駒橋	学校の日誌と記録から
岡部駒橋	檜原にきた「お人形使節」	
数馬房次	万葉集の植物名	
宇田篤夫	編集後記	

として」と述べているように、『檜原村史研究』は『檜原村史』刊行に向けての調査・研究の中間報告として刊行されたものであった。既述の村史編纂方針のうち「③村民に親しめる村史を目指す」という指摘を踏まえれば、資料批判や反証が可能である実証的な研究成果を『檜原村史研究』誌上に掲載したということになる。

また、第3巻「序」で小泉康作編纂委員長は次のような重要な指摘をしている。

貴重な古文書や民具等の散失も、極めて懸念されるものがある、本事業の重要かつ緊急性について、ここに改めて申上げ、多大の困難が予想される今後共、関係者の更に一段のご努力をお願いしたい。

早くは、戦後、全国的な資料保全や散逸防止に重要な役割を果たした近世庶民資料調査委員会が、アジア太平洋戦争後、「史料の散逸埋滅の速度は頗る急調を示すに至った」と指摘しているが¹⁹⁾、1977年の檜原村でも資料の散逸が危惧されており、その危機感が『檜原村史』編纂の原動力になっていることがうかがえる。翌1978年刊行の『檜原村史研究』第4巻「編集後記」において宇田篤夫教育長は「この第四巻をもって村史研究集録にピリオドを打ち、愈々この一巻から四巻を基礎に村史編纂にかゝり」と記して最終巻を宣言するが、『檜原村史研究』の研究蓄積が『檜原村史』に大きな意味を持ったことは疑いない。

1977年には瓜生卓造氏の『檜原村紀聞 その風土と人間』が刊行された²⁰⁾。謂わば「山岳文学」を切り拓いた瓜生氏は、檜原村を踏査し、多くの神社や石仏、その地の伝承に触れつつ、地元の人びととの触れ合い、当時の檜原村を丁寧記した随筆であり、現在にあっては檜原村の民俗誌、村民のヒューマンヒストリーとして貴重な一書である。この本は第29回読売文学賞を受賞するが、このことも『檜原村史』編纂と住民の地域の歴史に対する意識を惹起させたものと思われる。

その後、1988年4月に檜原村郷土資料館条例が施行され、同年5月に開館した。また、1989年4月には檜原村文化財専門委員会に古文書目録の編纂が委託されて、翌年、47文書群の文書目録を掲載した『檜原村古文書目録 村の昔を書き残したもの』が刊行されている²¹⁾。なお、80年代には伊藤好一氏が監修とした『牛五郎日記』が刊行された²²⁾。「牛五郎」とは後述する宇田家の分家・宇田牛五郎である。この刊行は檜原村の文化財行政が直接関わっているわけではないが、近代の農民の日記としては貴重な成果だ。

このように1970年代から80年代にかけて、檜原村は歴史資料の保全・活用が盛んであったものと評価し得る。そして、現在、『檜原村古文書目録 村の昔を書き残したもの』刊行から30年余を経て、掲載されている歴史資料の所在状況がどのようになっているかの再検討は必要であろう。この課題を檜原村の人びとに提起するためには、当該地域の歴史資料の重要性を述べ必要があるが、檜原村だけでなく、全国どの地域であったとしても、根拠なく、単純に「歴

19) 野村兼太郎「序」(近世庶民史料調査委員会編『近世庶民史料所在目録』1、日本学術振興会、1952年) 1頁。

20) 瓜生卓造『檜原村紀聞 その風土と人間』(東京書籍、1977年)。1996年に平凡社ライブラリーとして刊行。

21) 『檜原村古文書目録 村の昔を書き残したもの』(檜原村教育委員会、1990年)。

22) 『牛五郎日記』1～8(牛五郎日記研究会、1980年～1989年)。なお、監修を務めた伊藤好一氏は檜原村炭生産者と五日市炭問屋との争論を詳細に検討している(伊藤好一『近世在方市の構造』、隣人社、1967年)。

史資料は重要である」という論理で訴えかけたところで、高度経済成長期以前の地域社会と大きく変質した現在では、「歴史資料、即地域の人びとのアイデンティティ」ではない。むしろ丁寧な説明が求められる点であり、筆者は文書群の整理からその文書群の階層構造を明らかにし、文書群の特徴を提示するというアーカイブズ学の基礎的な作業を用いることによって、檜原村の人びととともに歴史資料の現状と課題を相談する契機を作れるのではないかと考えた。

そこで次章では、具体的に筆者が行った檜原村の一文書群の整理過程と階層構造を示してみたい。

3 檜原村宇田家の歴史と文書群の階層構造

檜原村における民間所在資料については、既述のとおり『檜原村古文書目録 村の昔を書き残したもの』があり、これが基本となるが、すでに30年以上を経ており、資料散逸の恐れは否めない。すでに拙稿で述べたように、多くの自治体で自治体史編纂から20～30年の時を経て、再度、民間所在資料の所在確認を行った時には10～30%もの散逸・廃棄・行方不明になっている²³⁾。散逸した民間所在資料を古書店やネットオークション、2013年以降爆発的な利用者数となっている「フリマアプリ」で見かけるが、ここでは偶然筆者が入手した檜原村内の文書群(檜原村宇田家文書)を事例として、その伝来と整理方法、その文書群の家の歴史、文書群の階層構造を述べてみたい。

2018年7月、『泰成堂書店古書目録』No.91に「武蔵国西多摩郡檜原村文書」が掲載され、筆者はこれを購入し、早速目録作成を開始した。整理方法は、「武蔵国西多摩郡檜原村文書」がビニル袋一括であったので、袋の表側の上から順番に文書を取り上げた。但し、継紙が剥離していて順番が錯綜していた文書が多かったので、それらについては早い番号と一緒にすることとした。整理の過程において、この文書群は宇田家が出所であると判断したので、「武蔵国多摩郡檜原村宇田家文書」という名称とした²⁴⁾。但し、宇田家と出所を同じにする文書群は『檜原村古文書目録 村の昔を書き残したもの』にも収録されている。現在、その文書群は檜原村郷土資料館に収蔵されている(文書番号1～183。全187点。最も古いものは天文元年(1532)正月の「出野村三島権現草創」)。「武蔵国多摩郡檜原村宇田家文書」は同村郷土資料館へ寄贈することになっているため、名称の整合性を検討する必要がある。

次に宇田家の歴史について概略を述べたい。宇田家は檜原村出野に住した。近世段階の檜原村は北側の北谷(北秋川に沿った地域)と南側の南谷(南秋川に沿った地域)に分かれており、出野は「南谷十組」のひとつであった。『新編武蔵国風土記稿』によれば、出野は「潤溪の前後に嶮岨の山を帯びて、中ほどを南秋川疏通し、其岸にそひて一條の往来あり、(中略)民家

23) 拙稿「文書の保存を考える」(『歴史評論』750、2012年)、前掲註8同「民間所在資料保全の過去・現在・未来」ほか。

24) この名称は、国立史料館(現在の国文学研究資料館)が家文書の文書群名を「国名+郡名+村名+家名」としたことによる。なお、西多摩郡の呼称は、明治11年(1878)11月18日、神奈川県が郡区町村編制法を施行したことによって生まれたものであり、国立史料館の場合、主に近世における「行政」区分を冠している。

25) 『新編武蔵国風土記稿』6(大日本地誌大系6、雄山閣、1963年)84頁～85頁。

は十九軒なり」と記されている²⁵⁾。伊藤好一氏の研究によれば、寛文7年（1667）では7町1反5畝13歩の土地で12軒が居住、天明2年（1782）では8町1反2畝9歩の土地で20軒が居住しており、近代初頭では17軒の住民のうち12軒が材木や炭焼きが経営基盤であった²⁶⁾。

宇田家の屋号は御前（オミヤ）であり、これは本家及び神社と関係のある家であることに由来する²⁷⁾。康永4年（1345）8月29日、出野の鎮守である三島権現（後の三島神社。現在の南郷神社）を勧請したのが宇田家の先祖である峰岸六左衛門藤原延影であると言われている²⁸⁾。近代に入っの当主は八十右衛門であり、出野組長・西光寺檀家惣代・三島神社氏子惣代を勤めた。近代の村内における持高は明治期初頭で6反4畝であるが、その他に所有炭林3ヶ所を有しており、材木売り上げは年間630円で、出野地区では最高額であった（明治14年）。

次に武蔵国多摩郡檜原村宇田家文書の目録編成について述べたい。武蔵国多摩郡檜原村宇田家文書の点数は115点と少ないため、本来であったら編成の必要はないと思われる。但し、この文書群をひとつの梃子として、檜原村全体の歴史資料保全や活用を、自治体や地域の方がたと目指せるのではないかと考え、編成を行って、この文書群の特徴を表現することにした。ここでは、明治時代の「出野組長」としての文書集積という特徴を生かすため、組織的な編成を試みた。また、シリーズ「布達・公用控」が宇田家文書の中で最も多いため、敢えてサブシリーズまで設けた。階層構造は【表2】のとおりだが、以下、宇田家文書のサブフォンドの内容を提示してみたい。

サブフォンド「家」。11点（綴2点含む。点数が少ないため、シリーズ以下は省略）。宇田家の家に関わる文書。宇田八十右衛門は明治14年に臨済宗東永山西光寺檀家惣代、明治15年に三島神社氏子惣代を務めていたが（文書番号23。以下、括弧内は文書番号）、点数が少ないためサブフォンド「家」に含んだ。明治2年に酒造米高10石で新規に酒造を始めている（53）。明治24年の茅替の傷害事件については『牛五郎日記』にも記載されている（56）。

サブフォンド「出野組年寄」。24点。近世檜原村23組のひとつ出野組として集積された文書。領主などからの文書についてはここに含んだ。シリーズ「土地」は組内田畑に関する絵図と入会山に関する文書である。大沢組と神戸組の山桑伐り出し争論（4）の文書があるが、出野組とどのように関わるか不明。シリーズ「薪炭」は幕末から明治初期の炭生産と流

表2 檜原村宇田家文書階層構造

サブフォンド	シリーズ	サブシリーズ	
家			
出野組年寄	土地		
	炭		
	信仰		
	触		
	金銭書上		
	火災		
	その他		
出野組組長	小遣		
	書状		
	布達		
	土地		
	領収書		
	人別		
	布達・公用控	布達	
		公用控	
		炭	
		種痘	
		徴兵	
		諸営業	
		地租・地券	
		出費	
養蚕			
墓地			
組長事務			
その他			
村会議員			
南郷学校世話人			

26) 伊藤好一『近世在方市の構造』（隣人社、1967年）155頁～179頁。

27) 前掲註4『檜原村史』929頁～931頁・947頁。

28) 前掲註4『檜原村史』822頁。

通に関わるものであるが、端裏書に「柏木野組」と記されている文書があり(24)、出野組以外の文書が混入している可能性や組を跨る炭生産が考えられる。シリーズ「触」は代官所から送られた触と請書。シリーズ「信仰」は寺社関係、シリーズ「その他」は前欠のため差出・宛名や奥書のみものを編成した。

サブフォンド「出野組組長」。73点(綴2点含む)。近世檜原村の23組制は明治9年5月2日に字の変更が行われ、13字に改められ、柏木野・出野・下川乗・上川乗組が南郷となった²⁹⁾。以後、字南郷旧出野組となるが、旧出野組長として集積した文書を編成した。当文書群で最も多いサブフォンドであり、その中でもシリーズ「布達・公用控」がほとんどを占めるのが特徴である。特に明治18年・19年に檜原村役場から出野組長である宇田八十右衛門に送られた布達とそれをまとめた公用控が多い。1枚ものの布達であっても綴痕が確認できることから、もともとは綴られていたものと思われる。

サブフォンド「村会議員」1点。明治15年当選人の請書を提出するよう命じられたもの。

サブフォンド「南郷学校世話人」。明治24年、「南郷学校」の新築の際、宇田八十右衛門が世話人を務めていたため、新築・開校に関するものを編成した。なお、「南郷学校」は明治7年檜原小学校第一分校(克明学校)として開校し、明治23年小学校令に伴い、南檜原尋常小学校(南檜原小学校)と改められた³⁰⁾。

4 目録作成後の状況と課題・可能性

ここでは「武蔵国多摩郡檜原村宇田家文書」の目録作成を終えて、檜原村でどのようなことを展開したかを述べた上で、課題や可能性を提示してみたい。

2018年12月、筆者は「武蔵国多摩郡檜原村宇田家文書」のアイテムレベルの記述と編成を完成させた。その際、檜原村内に他にどのような文書群が遺されているのか、『檜原村史』『檜原村史研究』『檜原村古文書目録 村の昔を書き残したもの』に基づいて所在情報をまとめた【表3】。その結果、村内外で65文書群が確認できた。これらの文書群の現状がどのようなものであるか、また、今後の活用などの諸点について何うべく、2019年1月16日に檜原村教育委員会での聞き取り調査を実施した³¹⁾。その際、今回の「武蔵国多摩郡檜原村宇田家文書」の目録、その階層構造と編成記述も提示した。

聞き取り調査の項目は以下の通りである。

- ①未指定文化財のうち『檜原村史』編纂の際に活用した古文書群についての現状を把握しているか。現状把握調査の予定などはあるか。
- ②『檜原村史』編纂に関わる公文書・原稿・古文書写し・調査記録などはどこの機関が所蔵していて、現在の保管・閲覧体制はどうなっているか。
- ③『檜原村史』編纂に関わった人びと(編纂委員など)の資料・メモ・ノートなどはどうなっているか。

29) 前掲註4『檜原村史』566頁。

30) 前掲註4『檜原村史』758頁～764頁。

31) 応対して頂いたのは、檜原村教育委員会社会教育係係長と郷土資料館館長代理である。

表3 檜原村歴史資料（古文書）所在情報

	備考	『檜原村史』該当ページ	『檜原村史研究』該当論文・ページ	古文書目録ページ	
1	土屋和夫家	下元郷	253,341,506		67
2	岡部慎太郎家・慎一郎家	上元郷	484,485	④小林隆志「檜原村の林業」p77～80	67
3	志村家・吉一家	本宿	386,425,428,437,467,469,477,487		3
4	小室裕嗣家	本宿。春日神社舞殿		③野中富雄「檜原村における中世武士の研究」p19	68
5	野村康夫家	笹野			74
6	田中進家	笹野			75
7	久保田紀弘家	笹野			76
8	坂本伸義家	柏木野	342,506	①岡部駒橋「檜原村の交通について」p33,35	
9	宇田薫家	出畑	379,432,434,720	①岡部駒橋「檜原村の交通について」p35 ②岡部駒橋「教育部門に関する資料」p69, 70,73	11
10	宇田篤夫家	出畑			71
11	武田静雄家	上川乗	210,377,385,386,393,394,396,416,439,440,451,456,459,461,474	③浜中銀之助「寛文の御水帳」p31～68	31
12	吉野高明家	白倉。大嶽神社神職	331	②市川敏「大嶽神社と大口真神（お神狗様）について」p31～33 ③野中富雄「檜原村における中世武士の研究」p30	81
13	清水章好家	下川乗	371,506	①岡部駒橋「檜原村の交通について」p33,34	74
14	清水正雄家	下川乗			72
15	池谷重雄家	下川乗			74
16	浜中銀之助家	上川乗			72
17	山本孝男家	上川乗			72
18	中村正巳家	笛吹	468,475,504,548	②小林隆志「漁業」p108 ②岡部駒橋「檜原村の交通に関する資料」p123	71
19	坂本孝嘉家	人里	436		73
20	高橋亨家	人里			74
21	岡部金雄家	数馬	394		73
22	山崎素重家	数馬。カンズクリ荘		④田中進「数馬の獅子舞来由書について」p60～68	
23	小林省太郎家	数馬			73
24	久保田靖雄家	千足	391		
25	市川利一家	中里			79
26	市川敏家	中里			79
27	吉野作楽家	白倉			82
28	浜中新家	大沢	512,519,720,723	①岡部駒橋「檜原村の教育史資料の一部」p78,79 ②岡部駒橋「教育部門に関する資料」p81	80
29	浜中浩家・武義家	大沢	846,847,849,850,851,852,854,855,856,858,859,860,861,862,863,864		81
30	浜中大治家	大沢			81
31	坂本貞良家	神戸			49
32	小林正作家	神戸			80
33	峯岸登家	宮ヶ谷戸。伊勢社神職	378,386,391,420,421,433,443,450,455,456,459,469,501	①岡部駒橋「檜原村の交通について」p40 ①小林隆志「檜原村の木炭について」p52 ②小泉章徳「峰岸河内「日記用留帳」写」p1 ③小林隆志「檜原村の養蚕業」p118 ④小林隆志「檜原村の林業」p76	63
34	峰岸泰策家	宮ヶ谷戸			83
35	高橋金季家	夏地			83
36	土屋兵治家・喜典家	小岩	396,490	④小林隆志「檜原村の林業」p97	83
37	車地藏家	小岩	780,781		
38	小林忠利家	中組	390		84
39	小泉節雄家	中組			84
40	小泉良正家	中組			84
41	山本泰家	都議会議員		②岡部駒橋「教育部門に関する資料」p68,99 ②岡部駒橋「檜原村の交通に関する資料」p123	
42	清水俊光家	村長		②岡部駒橋「教育部門に関する資料」p73,87,95 ②岡部駒橋「檜原村の交通に関する資料」p123	
43	中村光則家	-		③野中富雄「檜原村における中世武士の研究」p30	
44	小室桂司家	-		④小林隆志「檜原村の林業」p82	
45	三島神社・三島神社宮本家	五日市町	231,287,491	①小林隆志「檜原村の木炭について」p43	
46	阿伎留神社	五日市町	232	②市川敏「数馬と神戸にまつわる神話」p29	
47	金色山大悲願寺	五日市町	269		
48	森田家	五日市町	454		
49	高尾家	五日市町	483		
50	内野家	五日市町	496	①小林隆志「檜原村の木炭について」p47	
51	大野家	五日市町			87
52	大福七之助家	五日市町			89
53	平野千秋家	園分寺市	510		
54	満福寺	園分寺市			89
55	野本政雄家	八王子市			87
56	鷺山快山家文書	八王子市			90
57	平田家	坂戸市	306,355		
58	岡部長正家	田無市	336,338		
59	市川孝信家	三鷹市	518		89
60	川口家	入間市			87
61	田辺浩家	中野区			87
62	梶家	小金井市			88
63	高崎勇作家	福生市			88
64	戸倉家	-	513		
65	下山治久	-			88

- ④『檜原村史』の再編纂の予定にあるか。
- ⑤村内で郷土史の団体は存在するか。その活動はどのようになっているか。
- ⑥檜原村教育委員会・檜原村郷土資料館での専門員は配置されているか。
- ⑦村内の学校教育・社会教育において古文書群を中心とした歴史資料の活用は行っているか。
- ⑧歴史文化基本構想の策定などの議論がこれまであったか。
- ⑨2019年4月施行の改正文化財保護法について対策・対応を検討しているか。

聞き取り調査で判明したことは、檜原村の歴史資料が厳しい状況に置かれていること、歴史資料の継承に多くの問題点を抱えていることであった。特に『檜原村史』や『檜原村古文書目録 村の昔を書き残したもの』編纂時の貴重な成果（上記の①～③）は郷土資料館に引き継がれているが、民間所在資料については現状も含めて判然としないようであった。但し、この結果は他の自治体でも同様であると思われ、驚くに値しない。また、『檜原村古文書目録 村の昔を書き残したもの』で記載されているようにくずし字の文書（郷土資料館蔵、民間所在資料を問わず）を読解できる能力を有する村民はほとんどなく、檜原村において歴史資料保全・活用が盛んであった1970年代から80年代、その活動を中心的に担った村民の多くは鬼籍に入ってしまった。

このような現状ではあったが、既述の「武蔵国多摩郡檜原村宇田家文書」の目録、その階層構造と編成記述の提示をすることで、文書群の重要性とそれらの散逸の危機を檜原村の人びととともに議論することが可能となった。とりわけ、階層構造の提示は文書群の特徴を端的に提示するとともに、当該地域の歴史的な特徴をも端的に提示できた。

檜原村の歴史資料が厳しい状況にあるとはいえ、前向きな提案をした方が生産的であると考え、筆者は同年1月25日に「檜原村における歴史資料(特に古文書)の保全・活用についての提案」を策定して教育委員会・郷土資料館へ提案した。【資料1】は同年2月26日に議論を深化させて作成したものである。「檜原村における歴史資料(特に古文書)の保全・活用についての提案」の主眼は、第一に民間所在資料の確認と保全を行うこと、第二にこれらを地域の人びとと協働して構築することを推進するという点にある。その中で、2019年度はまず民間所在資料への興味を地域の人びとに惹起してもらうための講座やワークショップの提案を行った。さらに2020年度以降は、次の3つの柱を軸とする活動を提示した。①歴史資料保全。これは民間所在資料の確認調査と未整理歴史資料の目録化のためのロードマップ策定である。②歴史資料活用。地域の中での研究グループ構築。これは①を踏まえた歴史講座(成果報告会)開催である。③歴史資料普及。学校教育・社会教育の場で劣化した古文書の修復ワークショップ、古文書講座、ボランティア育成を進めることを提案した。

「檜原村における歴史資料(特に古文書)の保全・活用についての提案」を受けて、2019年2月に檜原村教育長をはじめとして教育委員会と談合し、2019年度に始動することが決定し、文化財専門員への資料保全レクチャーを開催することが決定した。また、2019年3月10日に開催されたシンポジウム「多摩の地域持続をめざした歴史資料の保存と活用」において、「西多摩郡檜原村における歴史資料保全と資源化の実践・課題」を報告し、パネラーや参加者とこの活動に関する意見交換を行った³²⁾。その際、檜原村教育長・課長・文化財専門員が参加した。

2019年5月16日にこの活動に関するロードマップを作成し(【資料2】)、教育委員会内部で

資料 1

檜原村における歴史資料(特に古文書)の保全・活用についての提案

西村 慎太郎

※2月26日の中村宗嗣教育長・三藤ひとみ課長・田中聡係長との話し合い、3月10日のとうきゅう環境財団シンポジウムを受けて作成。

前提

- ・2018年に『檜原村史』でも用いられた古文書(宇田家文書)が古書店にて販売しており、西村が購入の上、目録を作成。
- ・古文書の散逸は全国的に見て珍しいことではない。例えば、三重県の場合、『三重県史』刊行後、約30年経て17.2%が散逸・廃棄・行方不明という状況が判明した。
- ・今回の状況を文化財散逸として問題視するのではなく、今後の保全・活用を推進する。特に、宇田家文書には近世薪炭生産に関わる古文書が多く、檜原村の「エコツーリズム」推進の歴史的基盤整備に寄与できる。
- ・2019年3月10日シンポジウム「多摩の地域持続をめざした歴史資料の保存と活用」として宇田家文書の目録編成などを報告。

2019年度計画

- ・歴史講座を2回開催 / 主催は要検討(教育委員会の行事として位置付けることも可)
- ・うち1回は修復の実践やワークショップなども可

具体案

- ①檜原村文化財専門委員への資料保存・目録作成レクチャー
 - ⇒目的：古文書に対する知見を広げ、目録作成ノウハウを専門委員と共有する
 - ⇒方法：講座(1時間)と実践(実験的に2時間)
 - ⇒展望：継続的にボランティアなどで未整理資料の整理を進めることができるか検討
- ②学生など若手と郷土資料館・文化財専門委員など檜原村の方と共同で目録作成
 - ⇒前提：未整理古文書がどの程度あるかの確認(郷土資料館や各地域など)。各地域については次年度以降から所在確認を実施する方法の検討
 - ⇒方法：長期休み期間に1泊ないし2泊で学生が檜原村に行き、地元の方がたと目録作成を行う(年2回) / 郷土資料館で開催して参加者以外の方にも見学できるようにするなどイベント化も可能
- ③保存処置・修復などが必要な古文書の確認
 - ⇒展望：簡単な作業をボランティア・生徒などが行えるか検討
- ④歴史講座の開催
 - ⇒目的：村内の方と地域の歴史・文化の豊かさを共有し、文化行政と郷土資料館への理解を広げる
 - ⇒方法：3月シンポジウムをさらに分かりやすくしつつ、①②の成果として行う(90分程度)
 - ⇒展望：①②③の成果報告として毎年継続的に実施

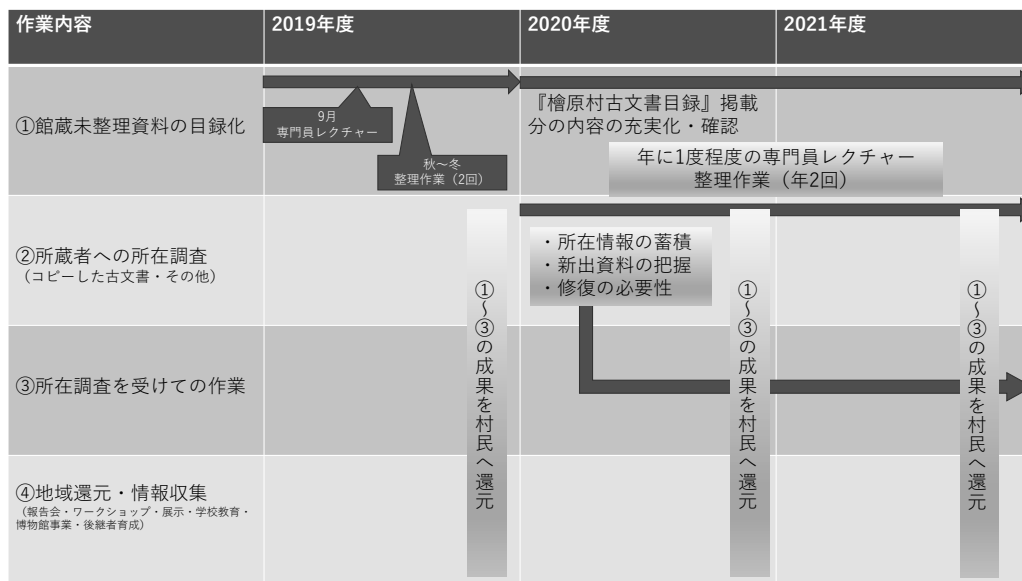
2020年～2021年度計画

- ①歴史資料保全：『檜原村史』掲載資料の所在確認調査(35文書群)。未整理歴史資料の目録化のためのロードマップ策定
- ②歴史資料活用：研究グループ構築。①を踏まえた歴史講座(成果報告会)開催
- ③歴史資料普及：学校教育・社会教育の場で劣化した古文書の修復ワークショップ(講師はすでに準備)。古文書講座。ボランティア育成。宇田家文書の資料館所蔵分と西村所蔵分の継紙剥離の修復

32) 主催は「多摩川流域所在アーカイブズの情報集約・公開に関する調査・研究 - 地域持続のために -」(公益財団法人とうきゅう環境財団2018年度多摩川およびその流域の環境浄化に関する調査・試験研究助成金、研究代表者宮間純一)。

の了承を得た。檜原村教育委員会・同村文化財専門員とともに、歴史資料の保全・活用の端緒を開くことができたと考えている。

資料2



おわりに

最後に本稿をまとめたい。

西多摩郡檜原村では、1971年から始まる『檜原村史』編纂事業以前にも様々な形で調査・公表が行われた。村史編纂は村民とその関係者で行われ、『檜原村史研究』の刊行、文書の所在調査の成果である『檜原村古文書目録 村の昔を書き残したもの』の刊行、そして、檜原村郷土資料館の開館に至った。瓜生卓造氏の『檜原村紀聞 その風土と人間』刊行と読売文学賞受賞もこの時期に当たる。1970年代から80年代は檜原村において郷土史の関心が高まった時期であり、歴史資料の保全と活用が活発であったものと評価できる。

あれから30年。これまでも指摘してきたように、全国的に自治体史編纂などから30年程度経て、民間所在資料の散逸は著しい。実際、その氷山の一角が本稿で紹介した檜原村宇田家文書である。しかし、このような民間所在資料の散逸を憂うだけでは、さらなる散逸に歯止めをかけることはできない。そこで、筆者は檜原村教育委員会に「檜原村における歴史資料（特に古文書）の保全・活用についての提案」を行った。その内容については【資料1】のとおりだが、ここで注意すべきは、【資料1】の前提として「この文書群はこのような内容で、このようなことが分かる（あるいは、このように利用できる）」という提案こそが不可欠なのだ。

歴史資料は地域や地域住民のアイデンティティであるとして、平板な貴重性を訴えても、他者が共鳴する時代ではない。高度経済成長期以降、地域社会が変質した現状で、特殊能力であるくずし字の読解が必要な古文書に共鳴せよという方が無理であり、縦しんば読解できたこと

ろで、もはや、地域住民がアイデンティティとして考えている事象と歴史資料との間に大きな隔絶がある。例えば、近世・近代の養蚕地域で目にするような桑畑は、いまどこにあるのであろうか。せいぜい黒澤明の映画『用心棒』の世界でしかない（それですら1961年の話である）。養蚕地域の資料で想像できるような景観を自身のアイデンティティと考えられる地域住民は決して多い数ではない³³⁾。

そのため、歴史資料に対する説明や意味づけが不可欠であろう。筆者はそれを「物語」を構成すること」と表現している³⁴⁾。蛇足的に述べれば、大規模自然災害などによって「資料レスキュー」が展開されているが、応急処置の先に何を実践するのかを問う必要がある。現在では、「物語」を構成すること」を等閑視し、「資料レスキュー」をすることのみが目的化しているのではなかろうか。なお、誤解のないように述べれば、本稿冒頭でも記した通り、活用に比重を置く改正文化財保護法を手放しで容認しているわけではない。今後とも国家権力と都道府県の動向には注視する必要がある。

既述の「檜原村における歴史資料（特に古文書）の保全・活用についての提案」は始まったばかりであり、これからどのような結論が出るかの実験である。そして、檜原村における地方協創の構築を目指すものであり、筆者と一緒に関わる地域の人びととの「歴史実践」である。

[付記]

本稿執筆と檜原村での活動に当たっては、檜原村教育委員会の中村宗嗣教育長をはじめとして、三藤ひとみ課長、田中聡係長、檜原村郷土資料館の清水達也館長代理に御世話になった。心より御礼を申し上げたい。

本稿は国文学研究資料館基幹研究「地方協創によるアーカイブズ保全・活用システム構築に関する研究」の成果の一部である。

33) 拙稿「「使えない文化財」は後世に残さなくていいのか ネットオークションによる散逸に加え、観光振興に役立つ文化財が優先される時代に」（『論座』朝日新聞社デジタル、2019年6月20日配信、<https://webronza.asahi.com/culture/articles/2019061400001.html>）。

34) 拙稿「静岡県南伊豆町地域の民間所在資料の保全 - 「物語」を構成すること -」（国文学研究資料館編『社会変容と民間アーカイブズ 地域の持続へ向けて』勉強出版、2017年）。

ABSTRACT

The Potential of Historical Material Preservation and Creation of Regional Collaboration in Hinoharamura, Nishi Tama-gun

NISHIMURA Shintaro

This article, based on the example of Hinoharamura in Nishi Tama-gun, Tokyo, where the author is currently deployed, will present the current status, issues, practices and possibilities of the conservation, reuse, and utilization of historical materials while looking at Hinoharamura's practices of conservation of historical materials (mainly ancient documents), while keeping cultural property administration and local history trends in mind.

From the 1970s to 1980s, local government history, historical research, and the preservation of materials were thriving in Hinoharamura, even leading to the construction of a museum. Based on the dissipation of ancient documents from all over the country left in the region, it was discovered upon hearing the current situation of Hinoharamura that there are many problems, and a proposal for "the preservation and utilization of historical materials (especially ancient documents) in Hinoharamura" was submitted to the board of education. At the time – since it is difficult for modern society to understand the discourse that historical materials are the identity of a region – we organized an archives-like catalog using one document group as a sample, and earned the opportunity to raise the importance of the matter to the board of education as the characteristics of said group were presented.

Academically, archival studies, history and regional historical materials will be mixed to present the practice of aiming towards regional contribution and sustainability.